

NECを訪ねて

南開大学

2007年11月29日、今日は東京のNECを訪問した。この世界有数の電器メーカーの見学によって多くのことが学べると思った。

NECに着くと、担当者の方からまずNECの沿革、その発展の歴史や業務等に関する全体的な説明があり、その後NECの中国における発展の歴史と現状についての紹介が重点的に行われた。そしてNECの中国本土における発展が、天津から始まったことを知ったとき、天津の南開大学の学生として格別な親近感を覚えた。

NECの中国本土における発展の軌跡を見ると、多国籍企業がどのように海外でその市場を開拓していくかがはっきり見て取れる。つまり、まずある地区に子会社を設立し、この子会社を通じて得た情報によってその市場の将来性を分析し、現地市場の特徴と合わせつつ、さらに市場ニーズに合った製品を開発していく。その後、子会社を次々に設立してより多くの地域市場への融合を目指すと同時に、技術を持った人材を吸い上げ、業務分野を開拓しながら社会効益に貢献していくことで、多国籍企業が社会に認知されていくというプロセスだ。1980年代にNECが初めて中国本土への進出を果たした時には、わずか1社しかなかった子会社が、今では数十社の子会社を持つまでに発展しているが、こうした成功モデルは、中国の民族産業にも大いに学ぶべき点があるように思う。後続の工業新興国としての中国が先進国との格差を縮めるためには、こうした典型的な多国籍企業の成功の秘訣を吸収することが重要で、そうした成功事例に自身の特徴と市場情勢を合わせて、一歩ずつ手順を踏んで「走出去（海外進出）」を果たしていくことが求められている。

講義室から出ると、私たちは3組に分かれ、それぞれ別々のルートでNECの電子製品分野の成果を見学することになった。私たちの組はまずNECが開発したロボット「PaPeRo（パペロ）」を見学した。本当に可愛らしいロボットだった！女子学生たちはそのあまりの可愛らしさに思わずキスしそうになっていた。それくらいロボットの形が可愛らしかった！担当者の話によると、このロボットは家庭用のもので、赤ちゃんと遊んだり、テレビのチャンネルを換えたり、家事を手伝ったりすることができるということだった。今はまだ本物の人間とは比べようがないが、科学技術はますます人々の生活を便利にする方向に進んでいるので、今はできないことでも、いつかは必ずできるようになるということ強く感じた。

可愛らしいロボットを見た後は、NECの電子盗難防止システムと電子識別システムを順次見学した。これらの電子製品分野の成果は、人々の生活レベルを大幅に引き上げ、ときには生活そのものを変えてしまうこともある。こうした科学技術の成果を目の当たりにし、私たちは驚きを隠せなかった。人は科学技術が自分たちの生活を変えたり、それに衝撃を与えるようなことを直に感じたときは、目に見えない力が一人ひとり心の最も深い部分に作用するのかもしれない。

私が言いたいたのは、「科学技術が世界を変え、科学技術が人類の社会を変える」ということであって、私たちがNECで見たものは、まさにこうした科学技術の成果であり、100年前の世界と比べまったく想像もできないような世界だった。科学技術の一つひとつの進歩は、私たちの生活や世界を大きく変え、社会を変革し、ひいては人間そのものを変え

てしまうこともある。世界は変わった。世界は小さくなった。今は中国から日本までたったの 3 時間で来ることができるが、昔は少なくとも数日、或いはもっと長い時間かけて往來していた。また、逆に世界は大きくなったとも言える。100 年前に外国に行くのは大変なことで、交通手段や情報のなさが大きな問題としてあった。ところが、今は家でキーボードをたたくだけで行きたい場所の情報をすぐに集めることができるし、それは月や宇宙についても同じことが言える。社会が法制化、民主化、道徳化の方向に向かっている時には、科学技術がもたらす変革が最も感じにくくなるのかもしれないが、たとえそうであったにしても、より多くのより強力な電子記録、電子追跡、電子識別、電子分析などのハイテク製品を持つことで、社会秩序の監視と保護という分野に変革がもたらされ、科学技術の力によって社会がより透明で管理しやすいものとなり、社会は今、静かに画期的な変化を遂げようとしている。なお、これはなかなか気づきにくいことだが、人類自身にも大きな変化が起こりつつある。哲学ではそれを異化と呼ぶが（これはマルクスの労働概念の異化から引用したものだが）、確かに、人々はキーボードをたたき、マウスをクリックすることにますます慣れ、今や誰も紙にペンを走らせるときの微かな摩擦によって生まれる手の心地よい感覚を味わおうなどとは思わないようになっている。人々はコンピュータの前で仕事をし、チャットし、ゲームで遊ぶことに慣れてしまうと、新聞を読むこと、外に出て友達と会うことを忘れてしまう。科学技術によってもたらされる各種指標（健康指標、衛生指標、環境指標など）をますます重視するようになる一方で、自分自身の情操面の発達を軽視するようになる……。私は何も科学技術がもたらすものを否定しようとしているのではない。ただ科学技術は確かに人を、その身体と思想を含めて変えてしまうということが言いたいだけだ。ここで挙げている例はやや消極的なものだが、科学技術はますます人間にやさしいものとなり、今後、人類がどこに向かおうとしているかを教えてくれている。そうした人そのものを尊重するような科学技術を発展させることこそが、科学技術の今後の方向性であるように思われる。

最後に質疑応答があった。私は、NEC は同業他社と比べてどういう強みがあるのかという質問を試みたが、NEC 側の責任者がそれに熱心に答えてくれた。それによると、NEC の競争上の強みはその網羅的な事業内容にあり、特に電子通信設備と IT ネットワーク面が強いということだった。このように偏りなく事業を発展させてきたことで、NEC の全体的な収益が良くなっているとのことだった。NEC の責任者が私の質問に熱心かつ詳細に答えてくれたことに感謝するが、私にはそれとは少し違う意見がある。このような機会を与えてくれた中国日本商會に感謝すると同時に、ここに未熟ながら私の個人的な意見を述べてみたいと思う。毛沢東主席の言葉に「二つの拳で殴ると、胸元が無防備になる」というのがある。確かに NEC は網羅的な事業内容を背景に、全体的な収益を上げているが、将来的に見た場合、それはかえって不利になるような気がする。通信機器分野の競争では、NEC がモトローラーやノキアに及ばないことは明らかで、また、IT ネットワーク分野ではインテルが強い。現在の NEC の強みは他社の同類製品が市場を完全に占有していないからであり、今以上に同業他社の市場占有が進めば、NEC がその強みを発揮できる空間としていったいどれだけのものが残るといふのだろうか。これはなかなか答えにくい問題だと思うが、事業内容を広げることの代価は、きめ細かさの不足となって返ってくる。もちろん、NEC がこの二つの分野で同業他社に勝つ自信があるというのであれば、私にとって NEC はさらに偉大かつ尊敬に値する企業だということになり、そうした場合は私の未熟な意見は取り下げ、心から NEC のために祝福したいと思う。

NEC の見学は、私たちの日本訪問における重要な活動の一つであり、その中で多くのことを学んだ。その時の感想を文字によってありのままに記録し、次の人のために役立てて

もらえばと思う。

最後にあらためて日中友好協会と中国日本商会からいただいた勉強と交流のための機会に感謝し、日中両国が今後も互いに啓発し合い、友好関係を発展させていくことを願う。

2007年12月17日